

Title	第1回ソ連邦農業・家内工業博覧会(1923年)について ：『クラスヌイ・アルヒーフ』史料を中心に
Author(s)	小野, 堅
Citation	大阪外国語大学学報. 38 p.149-p.164
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80613">https://hdl.handle.net/11094/80613</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 第1回ソ連邦農業・家内工業博覧会(1923年)について

——『クラスヌイ・アルヒーフ』史料を中心に——

小 野 堅

## О Первой сельско-хозяйственной и кустарно-промышленной выставке СССР (1923 г.)

—— Из рассмотрения материалов 《Красного архива》 по Выставке ——

Катаси ОНО

19 августа 1923 года в Москве на территории современного Парка культуры и отдыха им. Горького была открыта Всероссийская сельско-хозяйственная и кустарно-промышленная выставка. Выставка происходила 《под знаком смычки рабочего класса с крестьянством, под знаком укрепления хозяйственной и политической дружбы народов Союза》. Она явилась местом: представления состояния сельского хозяйства и кустарной промышленности, выявления возможностей страны для развития народного хозяйства, смотра достижений сельско-хозяйственной науки и практики и ознакомления с успехом в данной области за границей. Организованная в период начала нэпа, она сыграла важную роль в истории народного хозяйства СССР.

В этой статье рассматривается фон Выставки, ее содержание и значения.

.....

槌に栄光あれ 鎌に栄光あれ！

.....

博覧会を建てたのは下積みの労働者たち  
ロシアの奇蹟を生みだす大工たち  
深々と彼らに敬礼をしよう 大きな拍手をおくろう  
斧と鋸 万歳！！

.....

博覧会はあるのか？

—— ある！！

デミヤン・ベードヌイ、『未来への穴』（農  
業博覧会開催に寄せて）<sup>②</sup>より

## I

本稿は、1923年にモスクワで開かれた第1回ソ連邦農業・家内工業博覧会の検討であり、ソヴェト政権下で最初的全連邦的規模のこの博覧会がもつ、政治的、経済的、社会的意義をあきらかにしようとするものである。

レーニンのイニシアティブにより計画され実を結んだゴエルロ・プラン<sup>③</sup>が、後進的農業国を社会主義国へ移行さす過渡期の経済建設プランとして、すなわち一大国家経済計画としてもつ、その経済史的意義にくらべて、この農業博覧会のもつ意義は、それほど大きいものではないかもしれない。ソ連邦においても、またソ連邦以外の国のソヴェト経済史研究においても、この農業博覧会に注目するものは多くない。しかし、われわれは、新経済政策ネップ<sup>④</sup>当初期に、連邦的規模で農業の現況、農業の生産と科学の成果、将来の農業のあり方を明示し、国内だけでなく外国にもソヴェト・ロシアの潜勢力を誇示せんとしたこの博覧会のもつ意味は大きいものとする。

当時、この農業博覧会について外国の報道が、「ロシアの成長する力の証明」<sup>⑤</sup>であり、「国の内なる力と高揚、成長のあかし」<sup>⑥</sup>であり、「プロレタリア・ロシアの歴史における転換点」<sup>⑦</sup>であると報じたのも、このような催しについての報道一般のもつ拡大鏡的誇張だとは思えない。

レーニンはこの博覧会に大きな関心をよせ、1922年11月に博覧会への挨拶を書いている。「この博覧会は、非常に大きな意義をもつものとおもいます。すべての組織が、博覧会に十分な協力をあたえるものと信じています。最大の成功を心からいります。ヴェ・ウリヤーノフ(レーニン)」<sup>⑧</sup>。すでに病にたおれていたレーニンは、彼最後のモスクワ訪問の機会に、博覧会を訪ねている(1923年10月19日)<sup>⑨</sup>。新経済政策への政策転換を行い、「ネップのロシアから社会主義のロシア」を頭に描いていたレーニンが、ようやくにして復興の着実な歩みをはじめたソヴェト・ロシアの国民経済、なかんずく農業の達成の展示を眼の前にして、その感懐はどのようであっただろうか。

われわれは、以下、1923年のこの農業博覧会の背景と内容、さらにその意義についてのべてみたい。

本稿の史料は『クラスヌイ・アルヒーフ』に収録されているものが中心となっている。

## II

現在モスクワに常設のソ連邦国民経済達成博覧会 **ВДНХ** (1959年以降)の前身は、全連邦農業博覧会 **BCXB** (1939—1941, 1954—1958)である。モスクワ、オスタンキノに敷地 140ヘクタール、250以上の建造物をもつこの常設農業博覧会は、ソ連邦におけるコルホーズ体制の確立と、高度に機械化された大規模社会主義農業生産の成果を内外に示すものであった。部門別、地域別原則にもとづき展示されたこの博覧会には、約80万人が参加し(1939—1941)、第1年度にそこを訪れた見学者は350万人以上といわれた。第2次世界大戦で中断された同博覧会は、1954年8月に再開され、1959年に前記 **ВДНХ** へ引きつがれたのである。<sup>⑩</sup> この農業博覧会の先駆的役割を果たしたのが、ソヴェト政権下ネップ初期に開催された1923年農業博覧会であった。

ところで、革命前のロシアにおいて、一般に博覧会はどのようなものであったか。ソヴェト百科事典によれば、大規模な一般博覧会として、1850年、1860年にペテルブルグで、1864年、1895年にモスクワで、1887年、ハリコフ、1913年、キエフで開催され、このキエフの博覧会には、2000の出品者、1万点の展示品、そのうち約2000は動物であったことがわかる。また、専門的（部門別）な農業博覧会は、1857年のアルハンゲリスク県、ホルモゴールイの畜産博覧会がはじまりで、この博覧会には、主に牛が展示されている。その後、1866年、モスクワで馬の博覧会、1870年ハリコフとモスクワで羊の博覧会、1878年モスクワ、1879年ペテルブルグで、乳業の博覧会が、1880年ペテルブルグで家禽の、1895年ペテルブルグで養蜂の、1894年同じくペテルブルグで農業機械・農具の農業博覧会が開かれている。両首都を中心に開催された博覧会の他に、県、あるいは県間の一般博覧会も、リガ、オデッサ、トビリシ、ペンザ、キエフ、サラトフその他の都市で開催されており、また、ポルタワ、トゥーラ県では、地方の展覧会＝見本市が開催されている。<sup>⑪</sup>

以上のような革命前のロシアの農業博覧会は、大地主、工場主（農業原料消費者）、株式会社、大地主の賃借人のためのものであり、企業主たちは、博覧会で売買契約を行い、展示品、とくに家畜（農業用）は、競売に付された。<sup>⑫</sup> 資本主義下の博覧会が商業目的を第一におくことは当然のことである。

これに対し、「広汎な勤労農民への農業博覧会の啓蒙的・宣伝的影響はソヴェト政権下で発現される」<sup>⑬</sup> ことになった。ソヴェト政権下最初の試みは、1918年7月、シンビルスク（現ウリヤノフスク）市で開催された農業博覧会で、同博覧会へは、2万3000人以上の見学者があった。また、1918年12月11日—20日に、モスクワで開催された土地部・貧農委員会・コンミュン第1回全ロシア大会の代議員のために、ロシアの天然の富、10月革命前と後の国内の土地フォンドの配分、農業の状況にかんする、またコンミュンの活動にかんする資料が展示されている。<sup>⑭</sup>

ここで、1922—23年のソ連邦経済史上の状況であるが、この時期は、約3年間の国内戦、外国軍事干渉がソヴェト政権の軍事的勝利のうちにようやく終息し、1921年3月の第10回党大会で、国内戦期の「戦時共産主義」体制からネップへの移行措置が講ぜられ、レーニンのいう「急襲」策から「包囲」「迂回」策による社会主義への移行準備——国民経済復興の施策からはじまる——に入った時期である。農業分野では、食糧徴発から食糧税への切換えによる生産刺激策によって、生産の活発化がすすみ、この施策がようやく実績をしめしはじめた時期である。

一方、農業における生産関係であるが、戦時共産主義下で、農業における生産関係の変革が企図され、集团的社会主义経営への移行の志向は、1919年2月の『社会主义土地整理令』<sup>⑮</sup>として法令の形をとったが、実効はえられないまま、1922年のロシア共和国『土地法典』<sup>⑯</sup>制定によって、ネップ下での農業生産関係が定着することになる。

このような背景のなかで、国民経済の復興、なかんずく農業生産の復興の様態とソヴェト・ロシア勤労農民の潜勢力を農業博覧会の場に凝集、展示し、活動の成果を確認し、更なる出発のエネルギーを形成して行くべく計画されたのが、この全連邦的規模での農業博覧会であった。

### III

農業博覧会の計画案(人民委員会議、全ロシア中央執行委員会幹部会決定)が提示されたのは、1921年11月14日の農業人民委員部<sup>コレギア</sup>評議会の会議であり、同計画案はそこで採択された。<sup>18)</sup>

計画案によれば、「農業の急速な発展の極度の重要性と、そのためのきわめて精力的な施策の必要のために」、1922年10月1日を目標に、ソヴェト共和国最高賞各県コンクールを伴う全ロシア農業博覧会を組織することを農業人民委員部に付託するというものであり、この博覧会とコンクルの基本課題は、農業、林業の各部門にわたる、また農業工業の組織にかんする各県の活動の成果を提示しようとするものであった。<sup>19)</sup>

その活動にかんする主な項目を拾ってみると、1)耕種作物栽培の組織、輪作と新しい栽培の導入、2)集団経営の組織、3)園芸、果樹栽培、ぶどう栽培等、4)畜産、養禽、養蜂等、5)工芸作物栽培、6)育種、品種改良、7)農業試験事業、8)協同組合的、集団的農業経営の組織、9)農業文盲一掃のたたかい、文化啓蒙施策の組織、10)早魃とのたたかい、11)播種カンパニアの組織、12)農業改革の実施、土地整理活動の実行、13)土地改良施策の発展、土地改良事業の実施、14)農業協同組合組織の発展、15)農業の電化と機械化、16)泥炭事業の発展、17)林業および木材工業の現状と発展、などであり、農業、林業全般にわたる施策と活動の点検である。<sup>20)</sup>

他に、この計画案には、博覧会のための財政措置、褒賞制度とそのため的人员組織、計画実施のために各機関(すべての県執行委員会、共和国諸機関)への全面協力要請、博覧会敷地の割当等々が盛り込まれている。<sup>21)</sup>

また、1921年12月26日の農業の復興、発展の問題にかんする、ロシア共和国第9回ソヴェト大会の決定のなかでも、1922年の農業カンパニアの成果と欠陥の総括を目的とし、かつ、農業の向上に対して特別の努力を払った県、郡、郷および各個経営の全人民的な奨励鼓舞を目的とし、1922年秋に、全ロシア農業博覧会を開催し、優秀者にたいする褒賞を行うことを、農業人民委員部に委託している。同時に、人民委員会議には、博覧会のための必要資金の交付が委託されている。<sup>22)</sup>

当初の計画では、1922年の秋に博覧会開催を予定していたが、実際には、1923年8月に約1ヵ年開催が延期されている。<sup>23)</sup> この間の事情は『クラスヌイ・アルヒーフ』の史料からは明らかでない。ただ、『レーニン全集』の資料によれば、「博覧会の組織と凶作の結果の収拾という膨大な量の仕事のため、博覧会開催は1923年に移された」<sup>24)</sup>ことがわかる。事実、博覧会の準備はおくれていたようだ。1922年10月6日の段階で、博覧会中央委員会がモスクワ公共事業議長に手紙を送り、そのなかで、博覧会会場が同中央委員会および全ロシア中央執行委員会議長により、開催予定地(現ゴーリキー公園)に決定した旨、そして、同敷地内の博覧会中央委員会への移管手続を至急とること、同敷地の整備、環境整備等にかんする事業への協力を要請している。手紙の末尾に、「上記事項はいずれもきわめて急を要する性格のものです。したがって、博覧会中央委員会は、上記諸問題の大至急解決を切にお願いします」とあることから、博覧会組織の準備がおくれていたこ

とが伺える。

1922年10月19日に、全ロシア中央執行委員会の『全ロシア農業・家内工業（外国部付設）博覧会条令』が全ロシア中央執行委員会議長エム・イ・カリーニン署名のもとに採択（1922年11月11日付『法令集』に公表）され、この条令に基づき、農業博覧会は、精力的に準備されることになった。<sup>⑧</sup>

この博覧会条令は全33項から成り立っている。若干のコメントを加えながら、以下その要点をみてみよう。

まず、条令では、条令で決められた一般原則にしたがって、1923年中に、農業および農業と密接な関係をもつ小規模家内工業の博覧会を開催すること、また、同博覧会に特別外国部を設置することが唱われている（第1項）。博覧会に外国部を特別付置したことの意味は大きい。この点についてはのちにふれるが、ここでは事実関係だけを記しておく。当初人民委員会議、全ロシア中央執行委員会決定、農業人民委員会評議会採択の博覧会計画案にも、また、ロシア共和国第9回ソヴェト大会決定にも、外国部設置は出ていないが、1922年の段階では、博覧会をロシア的規模でなく、国際的性格のものに広げるべきだとの見解が出され、紙上でもそのことが強調された。レーニンも、1922年10月6日に、つぎのような挨拶を書いている。「モスクワにおける国際農業博覧会へ。あらゆる成功を期待します。簡単かつ急ぎの書面にておゆるし下さい。ヴェ・ウリヤーノフ（レーニン）」<sup>⑨</sup>（傍点一小野）。この挨拶は出されなかった。既述（本稿I章）の挨拶（1922年11月14日付の全ロシア農業博覧会への）<sup>⑩</sup>が送られたのである。

博覧会の目的は、1)ロシア共和国と連邦加盟共和国における農業の現況および家内工業の現況を紹介すること；2)農業加工工業および輸出の発展のため、国の生産力が提示しうる可能性を示すこと；3)農業の科学および実践の成果について、これら諸成果の農業実践への適用の可能性について、広汎な住民大衆に知らせること；4)外国の農業分野で達成した成功について、また外国工業の側からのロシア農業発展のための可能な援助について知識を与えること、である（第2項）。

博覧会の参加資格は、ロシア共和国、自治共和国、州のすべての国営、公営の施設、企業および集团的、個人的経営と生産であり、また、博覧会外国部には、外国の施設、企業が参加できる、となっている（第3項）。

開催地はモスクワで、期間は1923年8月から2ヵ月とする（第4項）。そして、博覧会には、次のような部が設けられる。1)科学・教育部、2)農業、林業試験事業部、3)農業耕作部、4)木材部、5)畜産部、6)家内工業部、7)獣医部、8)農作物加工部、9)畜産物、家内工業生産物加工部、10)家内工業部、11)協同組部、12)土地整理、移民開拓部、13)農業技師部、14)家政・生活様式部、15)労働部、16)輸出入取引部、17)農業・林業国家計画調達部、18)外国農業工業部（第6項）。

出品物の部内配列は県別に行われ、各共和国の民族生活様式の特異性、経済的特異性を発揮するようにする（第7項）。博覧会開催期間中に、農業、家内工業各分野別に全ロシアの規模の大会を開き、外国の代表者の参加もえる（第10項）。博覧会中央委員会が組織の中心となって活動するが（第16、17、18、19項）、博覧会について広く情報を流し、地方諸機関と住民との、地方諸機関

と博覧会中央諸機関との間に仲介機関を設立するため、また博覧会への各共和国、州、地方の組織的参加のために、地方博覧会委員会が設置され活動する（第21, 22, 24項）。外国からの出品物にたいする関税免除措置（第27項）が講ぜられ、コンクルの性格を出すための、優秀出品物にたいする褒賞、農業生産活動のすぐれた県にたいする国家最高賞が予定されている（第29, 30, 31項）。その他、組織・運営上の財政活動についても詳細に記されている（第8, 9項）。

この博覧会条令は、1922年12月16日の全ロシア中央執行委員会農業委員会（議長エム・カーリーニン）<sup>③</sup>の決定により、条令での博覧会中央委員会を中心とした活動が、他の国家諸機関の援助を受ける形となり、一層補完強化されたのである。

1922年11月10日に発表された、全ロシア中央執行委員会議長カーリーニンの、すべての国民経済会議議長、農業人民委員、県執行委員会あての電報<sup>④</sup>、および、1923年2月5日の同議長の、すべての自治共和国中央執行委員会、国民経済会議、すべての県執行委員会への電報、すべての経済会議、各共和国農業人民委員部、県土地管理部への同電報のコピー<sup>⑤</sup>、にみられるように、地方における博覧会への全面的準備活動が求められている。また、カーリーニンの、1923年3月6日の博覧会委員会全ロシア大会での演説や、ロシア共産党中央委員会書記、ヴェ・モロトフの、すべてのロシア共産党県委員会あての回状（1923年3月30日）<sup>⑥</sup>は、博覧会の目的、意義を強調し、博覧会の成功を呼びかけている。

一方、博覧会の建設労働者たちが、「敬愛する同志ウラジーミル・イリイチ」へあてた挨拶（1923年3月18日）<sup>⑦</sup>には、博覧会をブルジョア機構への一撃たらしめ、労働者・農民権力の一層の発展強化たらしめんとする革命的気概すら感じさせるものがある。冒頭に引いたデミヤン・ペードヌイの博覧会開催に寄せた詩のあの精神の高揚がそこにもある。

博覧会の準備は着々とすすみ、1923年5月に、博覧会中央委員会メンバーと共に博覧会敷地を訪れた、カーリーニンとヴェ・ヴェ・クイブイシエフ（労農監督人民委員）は、博覧会準備の進捗ぶりに満足し、予定期限内開催に自信をえている。<sup>⑧</sup>

#### IV

全ロシア農業・家内工業博覧会は、1923年8月19日に別図のような建物の配置で開催された。当日の『プラウダ』は、博覧会中央委員会議長エム・イエ・シェフレルの開会式典日程をのせている。その冒頭には、「この日は“都市と農村の結合”<sup>スミイチカ</sup>のスローガンのもとに農業再生の日とならなければならない」<sup>⑨</sup>とある。ソ連邦人民委員会議副議長エス・エス・カーメネフが開幕を宣し、連邦中央執行委員会議長が、礼砲とインタナショナルの歌にあわせて『第1回ソ連邦農業・家内工業博覧会』と記された旗を掲揚することにより博覧会はスタートした。<sup>⑩</sup>

統計数字的側面からみた、博覧会の概観を、博覧会にかんする総括報告のための資料<sup>⑪</sup>から引いて、次に示してみよう。

a) 組織管理機関。1923年2月1日までの博覧会準備活動は、5名のメンバーからなる博覧会

中央委員会があつた。その後、指導部3名をもつ博覧会中央委員会幹部会(17名)があつた。開幕後は、博覧会管理博覧会中央委員会が創立された。博覧会中央委員会の回数—20(決議92), 博覧会中央委員会幹部会の会議—40回(決定1365), 指導部の会議—89回(決定1872), 博覧会管理博覧会中央委員会—10回(決定246)。

b) 博覧会敷地。敷地(ロシア部, 外国部あわせて)—61デシャチーナ, うち, 約8デシャチーナは建造物。

c) 建築に要した用材。3777車輛分(230万2502立方フィート)(196のパビリオンおよびその他の施設用)。

d) 出品者。5000以上の出品者(19の共和国, 11の自治州, 50のロシア共和国の県, 54の民族, うち18は外国部)。

e) 展示品。15万点, うち主要な生産パビリオンでは5万7401点(試験部—5023, 耕種作物栽培部—9677, 土地改良部—3462, 畜産部—2653, うち生きた動物2176, 勤労部—2113, 農村部—2425)。家内工業部では8264の品目(展示品—4万以上)。外国部では4898品目(350を越す外国の会社から出品)。

f) 入場者。開催期間中(8月19日~10月21日)に161万8882人, そのうち69万6000人は3回以上訪問している。したがって延べ入場者数300万人。

g) 文化・啓蒙活動。243の講演, 27の公開討論, 23の集会, 36の文化の祭日および文化の日, 8の全ロシア的性格をもつ会議, 大会等。331名の解説者が招聘。

h) 博覧会中央委員会出版物。博覧会準備および開催期間中に102万64枚の印刷物, そのうち, 定期出版物—5種類, 案内書的なもの—16種類, 書籍, パンフレット—47種類。

i) 審査委員会。112回。参加者—458名, そのうち, 41名—労働組合と農民の代表。賞状—4243。うち国家最高賞—50, 国家功労賞—14, 1等賞—783, 2等賞—1250, 3等賞—977, 4等賞—491。感謝状—685。部門別には, 畜産部—2883, 家内工業部—550, 農作物部—288, 外国部—83, 土地改良部—82, 勤労部—21, 試験部—20。

j) 費用。博覧会経費—1300万ルーブリ, うち建設費—535万3000ルーブリ。場所のための支出—130万ルーブリ。経済機関, 協同組合, 各共和国関係費用—210万ルーブリ。

次に主要な部の内容であるが、やはり、博覧会総括報告資料<sup>④</sup>によると、大要次のようである。

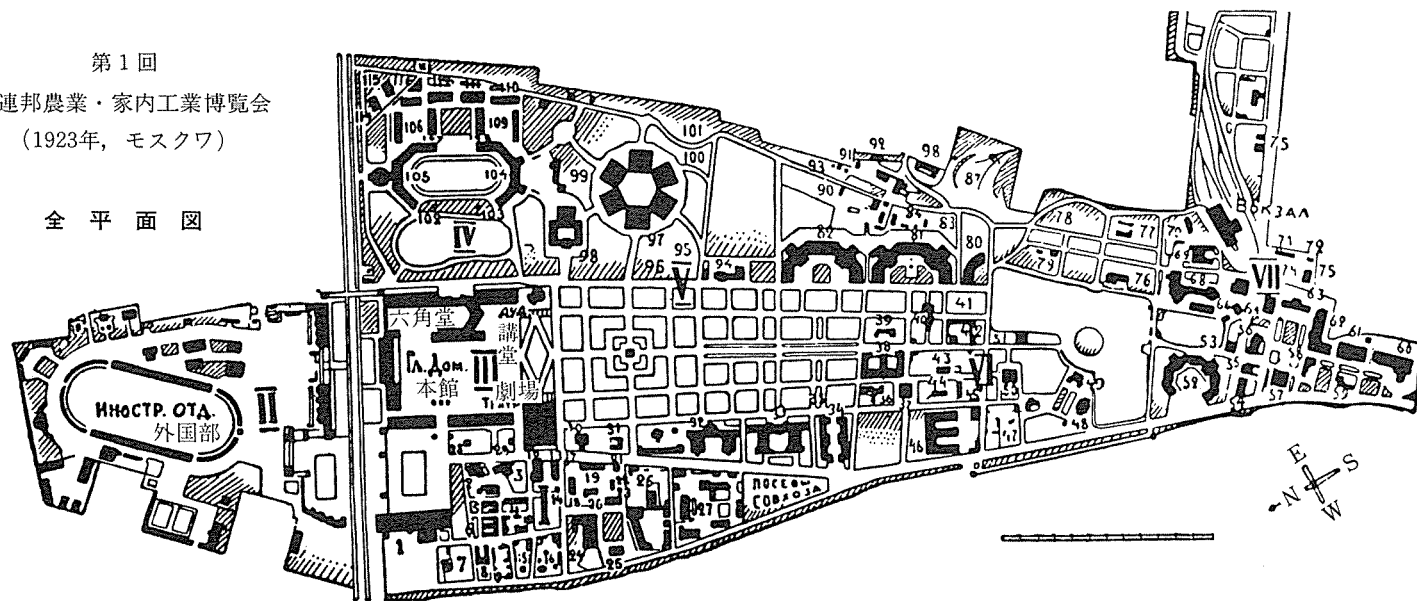
1) 試験事業部。ここでの課題は、試験施設の活動の展示と、農民、農業専門家が多い見学者に、農業の試験事業の活動と成果を知らせること。試験事業部への出品者は、ソ連邦の111の試験施設であり、とくに種子改良の試験結果利用が関心をひいた。1923年現在で、多くの大規模な試験場で480の純粋系統種の種子が育種され、約15万プードの淘汰された種子をもっていることが示された。

2) 耕種作物栽培部。ここでは、低収獲の第1原因となっている耕種作物栽培の欠陥が全面的に解明されている。また、試験施設30年間の活動で考え出された実践的方法が明らかにされ、農耕



第1回  
ソ連邦農業・家内工業博覧会  
(1923年, モスクワ)

全 平 面 図



## 博覧会建造物

### 番号 建 造 物

1. 家内工業部（旧プロムレイ工場）
2. ヴォーロゴダの古いイズバー
3. ヴォーロゴダの改良イズバー
4. ノーヴゴロドのイズバー
5. モスクワのイズバー
6. ペルミの古いイズバー
7. ナルビート〔労働者人民食堂労働組合〕の食堂
8. ペルミのイズバー
9. ヴォローネジのイズバー
10. 南部の改良イズバー
11. 農民の改良イズバー
12. アルハンゲリスクのイズバー
13. 耐火建築の模範的見本
14. 新聞『ベドノター〔貧農〕』
15. ウクライナのイズバー
16. クバンのイズバー
17. 托児所
18. 農事指導所
19. 消防パビリオンと哨所No.1
20. 圧延サーライ〔小舎〕
21. 鍛冶場
22. 種畜所
23. 牛乳加工場
24. 農民ドーム〔家〕
25. 郷執行委員会

26. 共産主義ウサーディバ〔屋敷〕
27. ソフホーズ
28. 雑誌『ノーヴァヤ・ディエレーヴニヤ〔新しい村〕』
29. 事務所『ドヴィーガテリ〔発動機〕』
30. 全ソ営業協同組合連合
31. 建設ビュロー
32. 全ソ消費協同組合連合
33. 農業協同組合連合
34. 林業中央管理局
35. 植物生育ドーム〔家〕
36. アルメニア
37. アゼルバイジャン
38. グルジア
39. 養蜂
40. ウクライナ
41. クラースナヤ・アルメニア（テント）
42. ドイツ・コンミュン
43. キルギス共和国
44. タタル共和国
45. バシール共和国
46. トウルケスタン
47. 穀物製品
48. 裁縫コンビナート
49. モスクワらしや
50. ユダヤ・コンミュン
51. 消防哨所No.3
52. 中央せん維
53. 消防哨所No.4

54. すぎ工業と印刷所
55. 製粉機建設
56. 製粉機部
57. 砂糖トラスト
58. タバコ・シンジケート
59. マホールカ
60. モスクワ農業工業
61. 加工一般部
62. 皮革シンジケート
63. 製肉所
64. ゴス〔国家〕牛乳
65. 氷室
66. 魚類中央管理部（漁労）
67. 食料品経済中央管理部
68. 漁労中央管理部（パビリオン）
69. クリミヤ
70. 製材（鋸挽き）
70. a. 駅
71. 通信人民委部中央パビリオン
72. 交通人民委員部自動車部
73. 同上
74. 都市駅、白ロシアーバルト海鉄道
75. 交通人民委員部農業サービス
76. アブハジャ
77. チュヴァーシ
78. オイラート共和国
79. 砂糖トラスト模範ドームック

80. 極東州
81. 林業部
82. 耕種作物栽培と牧草栽培
83. となかいい用柵（上家）
84. プリヤート
85. 外国貿易
86. 温室
87. カフカース
88. 調達部
89. 果樹園芸とぶどう栽培
90. クリン〔土地の一面〕温室
91. 医療部
92. 果物保存サラーイ
93. 植物保護部
94. 白ロシア
95. 全ロシア中央執行委員会
96. 『ティタン』煮沸器
97. 機械製作
98. 国家農業倉庫
99. 獣医療病院
100. 消防哨所No.2
101. 羊小舎
102. 103. 畜産タワー
104. 馬小舎
105. 馬小舎一馬場
106. 107. 108. 109. 馬小舎
110. 111. 112. 113. 牛小舎
114. 115. 豚小舎

出所：「Красной архив».

т. стр. 84—85.

部パビリオンでは、3 圃農法と輪作農法の闘争の場が提示されている。結果、輪作法が優れていることが示されている。

収穫の90%までも失われる旱魃問題にも大きな注意が払われている。とくに、旱魃とのたたかいにとって最良の手段として、草の生えていない休閑地と多種多様の播種に注目している。県別の展示品陳列にあたって地域別原則がとられている。このことは、農作物の普及度、もっともよく栽培されている中心地、適応する土壌、気候条件の諸要因を明らかに跡づけることができ、また、作物を今後のばしてゆく新しい地区の見当をつけることができるわけである。「知識なければ、穀物なし」で、農学上の知識の普及が注目されている。「生きた播種」が3デシャチーナの野外で実地に行われていることも特徴的である。

3)畜産部。これは、はじめての、真の全ロシア畜産展覧で、もっぱらロシア種で、しかも殆んどが農民の家畜であることは特徴的である。従来博覧会が、商業的企業によって、しかも、高価な外国種の販売のためであったのに比べて、このことは特記するに値する。また、家畜頭数が激減している状況下（1916年には1億8330万頭、1922年には1億90万頭、つまり45%減）で、至急に、しかも生産性の高い畜産活動の展開がもとめられている。地方種家畜が多いことも特徴である。出品された牛の70%はロシア産で、馬の50%は地方種であった。また、100頭の豚のうち55頭は農民のものであった。この3種類の数字は、博覧会畜産部の性格をよく示しているといえる。

4)土地改良部。いわゆる粗悪地である不耕作地6000万デシャチーナのうち3000万デシャチーナは沼沢化した土地で、正しい利用が求められており、干拓も必要な土地である。さらに2400万デシャチーナの、いわゆる自然牧場があり、同じく土地改良作業がもとめられている。このような状況のなかで、博覧会土地改良部のもつ重要性和実践的な意味が出てくる。土地改良展示の一部は、きわめて示威的に行われ、多数のモデルの形で、土地改良のプロセスが示され、知識の乏しい見学者にもわかるよう展示されている。干拓、灌漑の実際のやり方もきわめて明快に示されている。

5)労働部。課題の中心は、勤労者にきわめて困難な状況下で労働政権が、いかに労働条件改善をめざしてたたかっているか、そしていかに実際的な成果をあげてきたかを示すことであった。多くの展示品は、詳細に、労働の組織、利用のより充実した形態を明示している。科学的労働の問題、革命的立法の問題も最前列の問題となっている。

6)近代的農村と古い農村の部。この部は3つの部分、すなわち、①近代的農村、②改善された農家、③農村に奉仕する公共的建物、にわけられて展示されており、農業各部門の博覧会全景を包括する背景のようなものをつくり出し、見学者に、自然的、歴史的、生活様式的諸条件によって、さまざまなロシアの農民経営があることを示している。近代的農村と新しい農村の各農家が、どのような建造物、居住設備、家内工業をもち、また経営の一般的機構、その方向性、収益性、市場性はどうかということを展示している。

7)家内工業部。全人口の90%が農民であり、土地で働き住んでいることと、ロシアの土地の

厳しい自然条件による冬期の農閑期の長いことは、必然的に、家内工業の発展を促すことになる。家内工業の対象物品は、まず、農業用具（箕、槌）、家具、樹皮製品（かます、むしろ）、おりもの（木綿、毛）、じゅうたん、毛皮、荷馬車、有蓋大型荷車、馬車、その他、4万個以上の品目が集められている。この部の新しい傾向として、家内工業の機械化と動力の利用も大きな意味をもっている。このことは、また家内工業の協同組合化の問題を提起している。

8)外国部。政治的意義の他に、この部は、外国における農業の工業化、農業の機械製作の成果の観点から実践的に重要な意味をもっている。ロシアの農業システムにも、大きな変化が生じており、それは、土地耕作の方法、様式それ自体の再検討を生んでいる。農業コンミュン、アルテリ、集団経営は、電化、トラクターによる耕作、経営の機械化等の問題を提起しており、そのための機械を入手することが、西側諸国、アメリカの機械化との貿易関係全般としても焦眉の必要となっている。貿易上の関心が外国部設置において大きな役割を演じており、外国からの搬入された出品物の総数は4198で、展示品の数と種類の上でドイツが圧倒的に多く、つづいて、イタリア、チェコ・スロヴァキア、オーストリア、アメリカ、ラトヴィア、エストニア、フランス、イギリスその他となっている。展示品のうち75%が博覧会で売られ、15%が博覧会委員会に引き渡され、わずか10%だけが送り返された。

博覧会開催期間中に、博覧会中央委員会は、文化・啓蒙活動として種々の催しを行っている。9月16日には、何千人もの農民を対象に演説会を開き、チュチュエーリンが、『第1回農業博覧会の意義について』の演説を行っている。9月15日から、博覧会劇場『農民の家々』で新しい農民劇団の演劇や、学術・農学に関連した戯曲上演が開始されている。9月16日には『民族集会』が開かれ、同じ日に、水圧式泥炭採掘コーナーが開設されている。9月18日には、各民族の大集会が開かれ、ドイツ共産党中央委員会メンバー、テルマンをはじめ、多数の民族代表が参加している。9月19日には、『畜産の日』が設けられ、『ロシア畜産の発展の方途』の題で討論会が行われている。9月20日は『農業集団化の日』で、会場は、農民参観者で満員となり、「3甫農法とオブシチーナー掃」、「農村における経済革命万歳！集団労働万歳！」のスローガンのもとで、『農業機械製作および集団化について』の講演が行われた。夕方、討論会が開かれ、『集団化—これは農業改善の唯一の正しい道である』という決議が採択されている。9月21日に『新しい農村の日』、9月22日には『教育啓蒙の日』で、教育人民委員ルナチャールスキーが演説を行っている。9月23日には『協同組合の日』が設けられ、全ロシア中央執行委員会付属の青少年委員会が『子供の日』を設け、社会的教育とピオネール運動の理念を示し、また、農業博覧会の理念を子供たちに宣伝し、その意義を共和国の新しい世界に伝えることを目的とした。なお、その他、クララ・ツェトキンが演説した『収穫の日』（9月14日）、『ソ連邦諸民族祭典』（9月30日）や、『労働と機械の日』などの催しも行われた。<sup>⑫</sup>

1923年第1回全ロシア農業博覧会の大要は以上のものであるが、この博覧会はどのように評価されたであろうか。

博覧会企画当事者の側の博覧会評価は、9月16日のチチャーリンの演説『第1回農業博覧会の意義について』のなかでみられるように、「ソヴェト共和国において、かくも建設的で積極的な壮大な活動が行われている」<sup>⑬</sup>ことの確認と、「国際関係に新しい時期のはじまり」<sup>⑭</sup>としての博覧会の役割をおさえている点である。また、博覧会中央委員会幹部会がレーニンに贈った博覧会アルバム第1号の表書きに、「… 労農共和国の国民経済向上の歴史の輝やかな1頁を記すソ連邦1923年全ロシア農業・家内工業博覧会…」<sup>⑮</sup>と記されていることのなかにも、博覧会の位置づけをみることができる。

また、『プラウダ』が行った博覧会中央委員会幹部会議長エム・シェフレルとの会談のなかで、シェフレルは、「博覧会—これは、新しい段階、新しい活動方式への経済の移行にかんする広汎な実りある活動への労農共和国連邦の準備の最後の段階である。博覧会—これは、新しい経済の、経営の成果の道の最初の段階である」<sup>⑯</sup>とのべ、博覧会をソヴェト国家の発展の道における画期とみなしている。

同じく当日の『プラウダ』に掲載されている、ロシア共和国農業人民委員次官ア・スヴィーデルスキーの『世界で最初の博覧会』という標題の記事で、彼は、「博覧会は連邦共和国にとっての経済関係における強大で組織的な手段であるばかりでなく、全世界における労農権力をめざす強大な宣伝的手段であらねばならない……今日、モスクワに掲揚される博覧会の旗は、人間による人間搾取のない、諸民族の友好関係を基礎にした、古い社会、経済体制の廃墟から生まれでる新しい経済建設の来るべき勝利のシンボルとなるであろう」<sup>⑰</sup>と、博覧会の歴史的意義を評価している。

より具体的問題でのブディオンヌイの演説（『労働と機械の祭日』で行われた）は、ソヴェト・ロシアの経済—農業も工業も—の復興には3つのエレメントがある、すなわち、労働力、機械、役畜であり、農業においてこれら3つのエレメントが保障されるならば、ソヴェト・ロシアの農業は急速な進歩をとげるであろう、との主張である。<sup>⑱</sup>『博覧会条令』に掲げられた4つの目的（整理する意味でここに要約を繰り返すと—1)連邦的な規模で農業・家内工業の現況を提示すること、2)国の生産力の可能性を示すこと、3)農業の科学と実践の成果およびその成果の農業への適用の可能性を知らすこと、4)ロシア農業発展のため外国からよいものを吸収すること）は、いずれも、ブディオンヌイの主張するロシア農業発展のためのエレメント強化に収斂されるべきもので、博覧会は、その意味において、所期の目的を達成しえたといなされる。

一方、博覧会見学者（ここでは外国代表者）の評価であるが、国際農民会議代表として博覧会を訪れたクララ・ツェトキンは、『収穫の日』に参加して行った演説のなかで、「収穫の祭典をよろこび合うことができるのは、ロシアの農民と労働者だけである。なぜなら、彼らだけが、大地の実りを、住民大衆搾取のためにではなく、全勤労者のために、向けているからである」<sup>⑲</sup>とのべ、

博覧会はソヴェト・ロシアの自然の富を立派に示していると同時に、それは、「未曾有の業績——プロレタリアートと農民の連合、すなわち、創造的衝動における、すばらしい建設的活動における、そして土地の勤労者と工場の勤労者の強固な結合<sup>スミイチカ</sup>における両者の連合——を、世界に示している<sup>⑪</sup>」と評価している。

また、外国の博覧会報道では、ドイツの『ハンマー・ウント・ジーヘル』が、「2年前には飢えが、だが今日、国内なる力と比類なき高揚、成長のあかしである大農業博覧会がある<sup>⑫</sup>」とのべ、「ポリシェヴィキ・ロシアは強力となり、強大な国家になるであろう。ロシアとのきわめて緊密な同盟こそが、ドイツを破滅から救うであろう」と、博覧会で示された大きな潜勢力をもつ新生ソヴェト・ロシアへの期待を寄せている。

ここで、最後にわれわれは1923年農業博覧会の意義について総括してみたい。同博覧会は、大きく2つの意義をもつと考える。1つは、国内的意義であり、今ひとつは国際的意義である。

まず後者についていえば、ソヴェト共和国の对外政策の一環として博覧会がもつ国際的意義の面である。ちょうど利権事業が、外国から最新の技術をとまなう資本を導入し、ソヴェトの自然の富の開発を行い、それによって経済的利得を計ると同時に、政治的には、ソヴェト政権が国民経済復興、社会主義への移行路線の推進のために平和的外交政策として押し出した施策という一面をもっていたのと同様の国際的意味を、博覧会ももっていたと考えられる。全ロシア農業博覧会に外国部を特設し、外国の農業における先進的成果を学びとり、それをソヴェト農業の発展に活用せんとする経済的側面からのインタレストの他に、外国の諸企業に博覧会への扉を大きく開き、同時にこの窓を通してソヴェト・ロシアの経済的潜勢力と政治的方向性を世界へ知らせようとした意味は、国際的にきわめて大きいといわなければならない。

また、外国からみた社会主義政権下における農業博覧会のもつ意義の大きさである。それは、博覧会そのものの性格の質的变化の確認であり、新体制が示す新しい力の誇示の承認であった。ネップへの移行が、社会主義から遠のく道であるとみていた資本主義国での見解への、先ずは第一の一撃であったといって過言ではないと思われる。

一方、国内的意義についてであるが、なによりも、経済的意義の大きさが前面に出る。本稿のこれまでの叙述からも明らかなように、国民経済（とくに農業、家内工業）の現状を確認し、新しい科学と過去の実践の成果をとりいれ（外国からのものも含め）、経済復興の最良の途を全連邦的規模で検討し、将来の農業の発展方向——協同組合的集団化——をも示唆できる場を博覧会が提供したことの意味は大きい。

政治的意義については、労農同盟の観点からとらえることができる。すなわち、農業の復興から着手し、工業の復興を押し進めて行くという国民経済復興プランは、政治的には労働者と農民の結合同盟関係の強化のプランでもあった。ソ連邦結成（1922年）後における労農同盟のもつ意味は一層大きいものとなった。デミヤン・ベードヌイの槌と鎌に栄光あれ！の心は、博覧会のひとつの主題であったとみなすことができる。

さいごに社会的、文化的意義について。協同組合運動においても、ゴエルロ電化運動においても同然であったが、博覧会のもつひとつの大きな意義は、その文化的、啓蒙的役割であった。全人口に対する割合が90%という農村人口、その大半が文盲状態にあった当時の状況で、博覧会の文化的、啓蒙的意義の大きさは特筆するまでもない。つねに、先進的、規範的なものをそのねらいとする博覧会一般の性格からいっても、文化革命が文盲一掃運動からはじまったソヴェト・ロシアのこの面における後進性のなかで、全ロシア農業博覧会が果たした文化的意義は明らかである。

われわれは、以上のような国際的、国内的意義の総括を基として、ソ連邦経済史（ソ連邦史）上に、第1回ソ連邦農業・家内工業博覧会を位置づけることができると考える。同博覧会は、ソ連邦における資本主義から社会主義への過渡期政策としての新経済政策ネップの出発期に記された小さくない事実であった。

#### <註>

- ① Красный архив, т. 100, 1940, стр. 79—120（リプリント版, Kraus Reprint Ltd. 1966）。  
この『クラスヌイ・アルヒーフ』に収録されている1923年農業博覧会関係史料は、この史料の収録を行ったと思われるシェベレーヴァによれば、10月革命国家中央文書 ЦГАОР に保管されている同博覧会中央委員会関係の史料の一部である。
- ② См. «Правда», № 185, 19 авг. 1923 г. (マイクロ・フィルム)。
- ③ 参照、拙稿「レーニンとゴエルロ・プラン」——『大阪外国語大学学報』第25号, 1971年, 165—179ページ。
- ④ ネップについては、門脇彰、荒田洋編『過渡期経済の研究』、東京、日本評論社、昭和50年；上島武氏の『大阪経済論集』に発表された一連の論文；拙稿「ネップにかんする若干の考察」——『大阪外国語大学学報』第37号, 1976年などがある。
- ⑤ Красный архив, т. 100, стр. 117. — Заграничная пресса о выставке.
- ⑥ Там же.
- ⑦ Там же.
- ⑧ В. И. Ленин, Полн. собр. соч., т. 45, стр. 298 (邦訳, 大月書店版, 『レーニン全集』第33巻, 450ページ); Красный архив, т. 100, стр. 86. — Приветствие всероссийской Сельско-хозяйственной Выставке.
- ⑨ См. Ленин, Полн. собр. соч., т. 45, 1971, стр. 549.
- ⑩ См. Большая Советская Энциклопедия, т. 5, 1971, стр. 549.
- ⑪ См. там же.
- ⑫ См. там же.
- ⑬ См. там же.
- ⑭ この大会の性格については、拙稿「『社会主義的土地整理および社会主義農業への移行措置にかんする条令』(1919)について」(『大阪外国語大学学報』第34号, 1975, 17—28ページ)のなかでふれている。
- ⑮ См. ВСЭ, т. 5, стр. 549.
- ⑯ 参照、前掲(註⑭)拙稿。
- ⑰ この『土地法典』については、大崎平八郎著『ソビエト農業政策史』、東京、有斐閣、昭35, 125—129ページで解説されている。
- ⑱ См. Красный архив, т. 100, стр. 86. — Выписка из протокола заседания Коллегии НКЗ, 14 ноября 1921 г., №115.
- ⑲ Там же, стр. 87.

- 23 См. там же.
- 24 См. там же, стр. 87—88.
- 25 См. там же.
- 26 См. там же, стр. 88. — Из постановления IX Съезда советов РСФСР по вопросу о восстановлении и развитии сельского хозяйства, 26 декабря 1921 г.
- 27 Экономическая жизнь СССР, кн. 1-ая, 1967, стр. 120. には, 1923年8月17日に Положение о выставке が中央執行委員會で承認され, 8月19日に博覧会が開幕した, と記録されている. 序ながら, 前者『条令』は博覧会開催を前にして, 1922年10月19日付の全ロシア中央執行委員會の『博覧会条令』(『ブラウグ』では декрет を用いている) にしたがって, 8項目からなる『条令』として出されたものである. См. 〈Правда〉, № 185, 19 авг. 1923 г.
- 28 Ленин, Полн. собр. соч., т. 45, стр. 579.
- 29 См. Красный архив, т. 100, стр. 88—89. — Письмо Главного Выставочного комитета Московского хозяйства, 6 октября 1922 г. なお, このモスクワ河に接している博覧会予定地は, ほとんど市の中心にありながら, その大部分(一部, 病院, 公園をのぞき)が, 以前の市のゴミ廃棄地で, 衛生的な面からも, ここに博覧会をおくということは, 街の環境改善という大きな利点があった.
- 30 Там же, стр. 89.
- 31 См. там же, стр. 88—94. — Положение ВЦИК о Всероссийской сельско-хозяйственной и кустарно-промышленной выставке с Иностранным отделом 19 октября 1922 г.
- 32 Ленин, Полн. собр. соч., т. 45, стр. 580.
- 33 См. там же.
- 34 См. Красный архив, т. 100, стр. 94—95. — Постановление Сельско-хозяйственной комиссии ВЦИК, 16 декабря 1922 г.
- 35 См. там же, стр. 94. — Телеграмма председателя Сельско-хозяйственной комиссии ВЦИК М. И. Калинина всем предсовнаркомам, наркомземам и губисполкомам.
- 36 См. там же, стр. 96. — Телеграмма председателя ВЦИК М. И. Калинина всем ЦИК и СНК автономных республик, всем Губисполкомам, копия всем ЭКОСО, всем НКЗ республик, всем Губземуправлениям, 5 февраля 1923 г.
- 37 См. там же, стр. 96—98. — Речь М. И. Калинина на Всероссийском съезде выставочных комитетов, 6 марта 1923 г.
- 38 См. там же, стр. 98—99. — Циркулярное письмо Секретаря ЦК РКП(б) В. М. Молотова всем губкомам и обкомам РКП, 30 марта 1923 г.
- 39 См. там же, стр. 98. — Приветствие тов. Ленину от строителей Всероссийской сельско-хозяйственной и кустарно-промышленной выставки, 18 марта 1923 г.
- 40 См. там же, стр. 100. — Из информационной сводки Пресс-бюро Главного комитета по устройству Всероссийской с.-х. выставки, 5 мая 1923 г., № 44.
- 41 〈Правда〉, № 185, 19 авг. 1923 г.
- 42 См. там же.
- 43 См. Красный архив, т. 100, стр. 107—109. — Из материалов к итоговому докладу о Всероссийской сел.-хоз. и куст.-пром. выставке 1923 г.
- 44 См. там же, стр. 109—113.
- 45 См. там же, стр. 103—105. — Из бюллетеня Иностранного отдела Главного Выставочного Комитета, 26 сентября 1923 г., № 5.
- 46 Там же, стр. 103.
- 47 Там же.
- 48 Там же, стр. 102—103. — Из бюллетеня Иностранного отдела Главного Выставочного Комитета, 129 июля 1923 г., № 23.
- 49 〈Правда〉, № 185, 19 авг. 1923 г.
- 50 Там же.
- 51 См. Красный архив, т. 100, стр. 107. — Речь тов. Буденного на празднике труда и машины



Всесоюзной сельско-хозяйственной и кустарно-промышленной выставки, 7 октября 1923 г.

④<sup>9</sup> Там же, стр. 105. — Речь Клары Цеткин на празднике урожая Всесоюзной сельско-хозяйственной и кустарно-промышленной выставки, 14 сентября 1923 г.

⑤<sup>0</sup> Там же, стр. 106.

⑤<sup>1</sup> Там же, стр. 117. — Заграничная пресса о выставке.

⑤<sup>2</sup> Там же.

(1976. 9. 3.)